

- 龍谷大学大宮学舎 140 周年記念 -
大宮図書館 2019 年度 特別展観

源氏物語展

～いとみじき花の陰に～



380
YEARS
ANNIVERSARY
大宮学舎は140周年

会期：2019年11月26日(火)～11月28日(木)

会場：龍谷大学大宮学舎 本館1階 展観室

時間：11月26日(火)、27日(水) 10:00～16:30
11月28日(木) 10:00～17:00

大宮図書館 2019 年度特別展観

源氏物語展

特別展観の開催にあたって

龍谷大学大宮図書館 2019 年度特別展観は、「源氏物語展～いみじき花の陰に～」をテーマに開催いたします。

『源氏物語』は今からおよそ 1000 年前の平安時代中期に、紫式部によって著された全 54 巻からなる長編物語です。主人公の光源氏をはじめとする多くの登場人物によって織りなされる虚構の貴族社会の物語は、多くの読者を得てきました。歌人や連歌師にとっては必須の古典となり、あるいは武家にとっても読み学ぶべき教養の書となるなど、後世の文化にも大きな影響を与えました。当然、その過程で多くの『源氏物語』の写本が作られ、伝えられました。しかし、そのことが本文の乱れを生じさせる結果も招きました。

そこで、鎌倉時代の初期、信頼できる『源氏物語』の本文を整えようとしたのが藤原定家(1162～1241)です。定家が「家の証本」と定めたいわゆる「青表紙本」は室町後期以降、『源氏物語』本文の主流になりました。現在の活字本のほとんども青表紙本に依拠しています。ただし、定家自身によって作成された写本自体は、ごく一部の巻しか現存していませんでした。

ところが、今年の 10 月、定家に関与したとみられる第 5 帖「若紫」の写本が発見され、大きな話題となりました。この写本の鑑定に貢献されたのが、本学客員教授の藤本孝一先生です。

今回の展観では、『源氏物語』に関する新発見と大宮学舎開設 140 周年とをともに記念して、大宮図書館が所蔵する『源氏物語』の写本、刊本、注釈書、絵巻物などを展示いたします。この機会に、『源氏物語』が平安時代から現代にまで伝えられてきた歩みに触れていただければ幸甚です。

2019 年 11 月 龍谷大学大宮図書館



1 源氏物語

江戸初期写 袋綴装 54冊

縦 27.2×横 21.6cm 請求記号 021-430-54 写字台文庫

『源氏物語』は、紫式部（生没年不詳）が11世紀初頭に著した、54巻からなる長編物語である。

本書は、紺地表紙に題簽を貼り、「夢のうき橋」までの巻名までを記す。書型は^{おおほん}大本、11行書である。本文料紙は、^{ひちよませすき}斐楮混漉。奥書などはない。



2 源氏物語

江戸前期写 列帖装 54帖

縦 16.1 × 横 16.1cm 請求記号 021-597-54 中川文庫

灰青色表紙の中央に金泥模様入り白地題簽^{しらじだいせん}を貼り、「きりつほ一」などと記されている。書型は升形本^{ますがたほん}、8行書である。黒い塗箱に54帖揃で納められている。下端に水濡れのシミはあるものの、虫損のないきれいな本である。少し異本校合書き^{きょうごう}入れが見られる。奥書などはない。本学教授であった中川浩文氏の旧蔵書であり、「中川蔵書」の朱方印が押されている。



3

源氏物語 (絵入源氏物語)

承応3年(1654)刊 袋綴装 60冊

縦27.2×横19.1cm 請求記号913.36-7-60

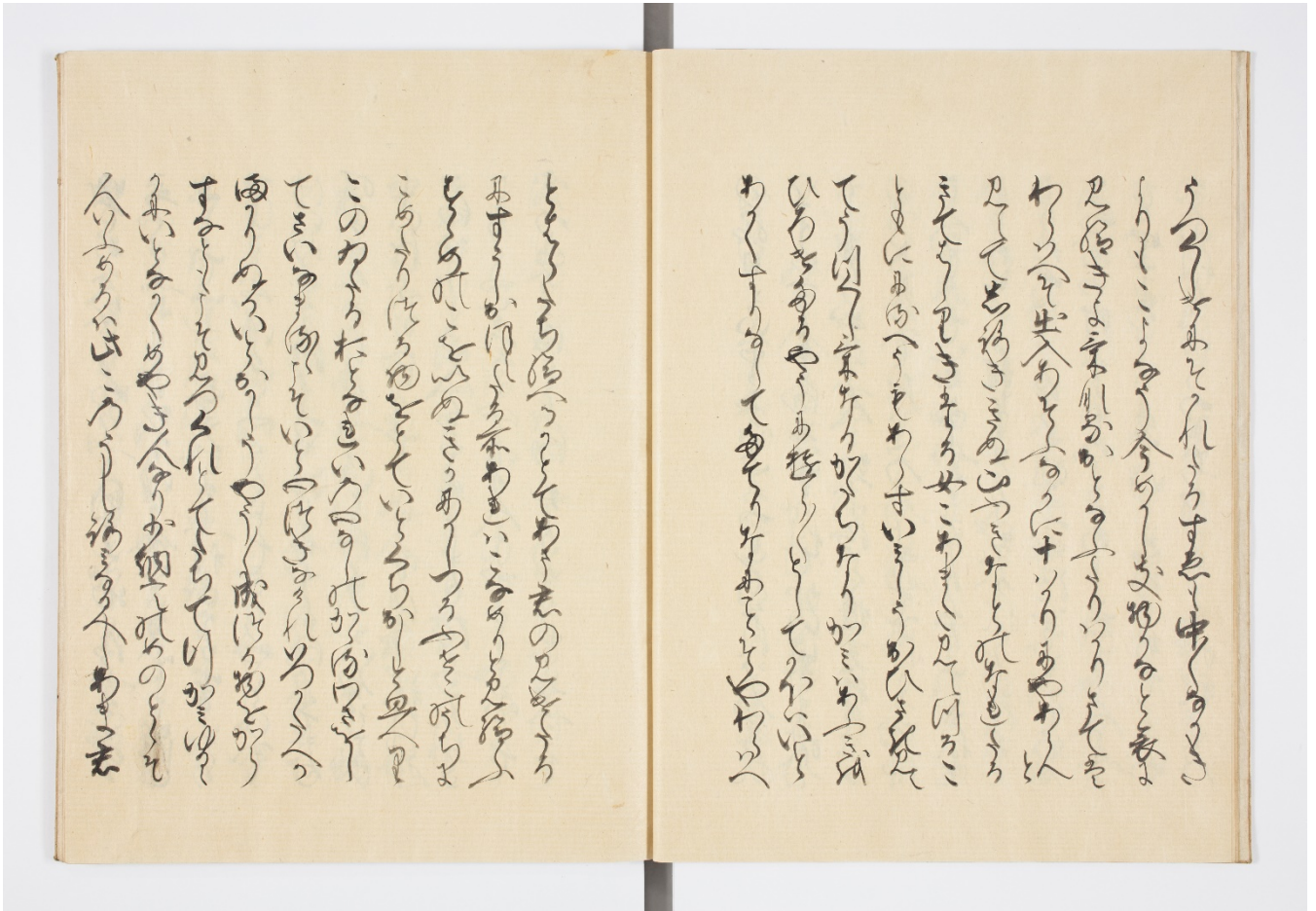
町版で最初の絵入りの『源氏物語』。承応3年(1654)に八尾勘兵衛(当時の出版業者)が刊行した。紺地表紙に素紙の題簽^{だいせん}が中央に貼付されている。「きりつほ一卷」から「源氏物語系図」までがある。書型は大本^{おおほん}、11行書である。朱墨両筆による書き入れが見られる。「源氏物語系図」巻末から、本文は一条兼良本系統^{かねら}と見られる。また、「夢浮橋^{ゆめのうきはし}」の巻末に山本春正^{しゅんしょう}の跋文(慶安3年)がある。



しゅしよ
首書源氏物語

一竿斎能貨著 寛文13年(1673)刊 袋綴装 54巻系図1巻 55冊
縦27.4×横20.0cm 請求記号913.6-6-55 写字台文庫

著者一竿斎^{いっかんさい}は、北野天満宮^{のうか}の社僧能貨である(『北野拾葉』参照)。「首書」とは頭注のことである。『源氏物語』に限らず、古くは注釈と本文とは別々の書物であることが一般的であった。そのため、刊行当初、本書は本文のすべての注釈を具えている点で極めて画期的な存在であったと考えられる。本書の方式は、北村季吟^{きぎん}が著した『源氏物語』注釈書である『湖月抄』^{こげつしょう}に継承された。



5 源氏物語

江戸初期写 袋綴装 54冊

縦30.3×横23.4cm 箱入 新規収集貴重資料

『源氏物語』54帖の江戸時代初期写本。蔵書印主は不詳であるが「西洞院蔵書」の朱方印、「淳風堂章」の円形印などが捺されている。

縦30.3cm、横23.4cmにも及ぶ特大の書型が特徴的である。全体は十名程度による寄合書であり、たとえば「蓬生」^{よもぎう}「藤裏葉」^{ふじのうらば}「竹河」^{たけかわ}の帖は定家様による同一筆蹟である。表紙の装幀、料紙、筆蹟などから、名のある公家によって製作され、伝えられたものと思われる。本文の系統は、藤原定家の校訂になる青表紙本系統のものだが、河内本本文を異本注記する箇所もある。



6

さんじょうにしきんえだじひつこうほん

さいりゅうしょう

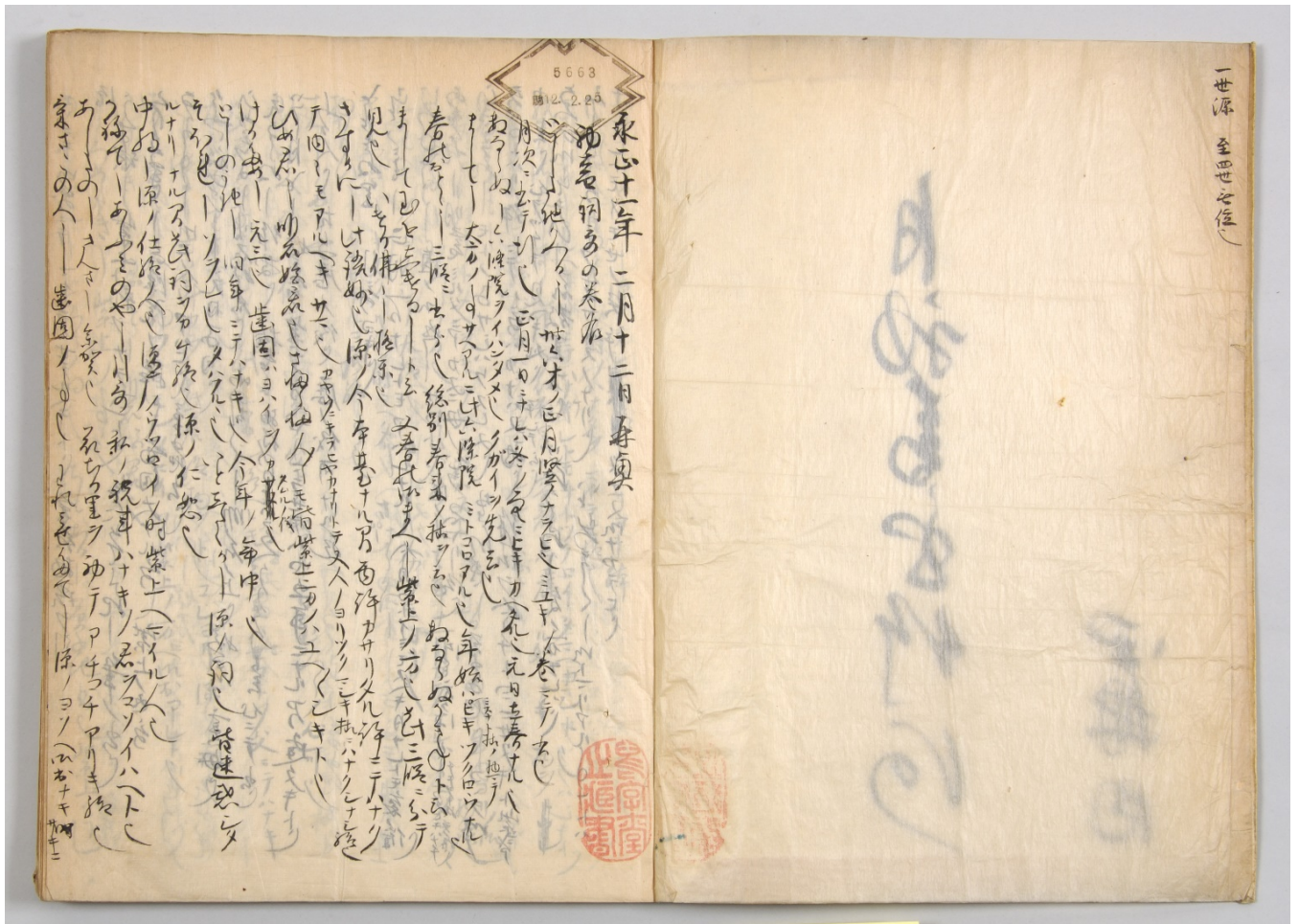
三條西公条自筆稿本 源氏物語細流抄

大永～天文年間（1521～1554）成立 改装4冊

縦 24.8×横 47.4cm 請求記号 021-421-4

『細流抄』とは、三條西^{にしきねたか}実隆（1455～1537）が著した『源氏物語』の注釈書である。本書は、能登の守護大名・畠山^{よしふさ}義総に送られた注釈書の草稿本にあたる。義総からの注釈書の注文に対して、実隆は自身のかつての講釈を息子の公条^{きんえだ}が書きとどめたもの（聞書）をもとに作成することにし、まず公条が下書きを作成し、実隆が手直したうえで清書本を完成させたと見られる。このとき公条の作成した下書きが本書である。公条はその後何十年もこの草稿本を手元に置いて、研究成果を書き込んでいった。したがって、本書は実隆の『細流抄』そのものではない。

なお、紙背文書も、戦国時代の三條西家や公家社会の実態解明に資する貴重な史料として注目される。



7

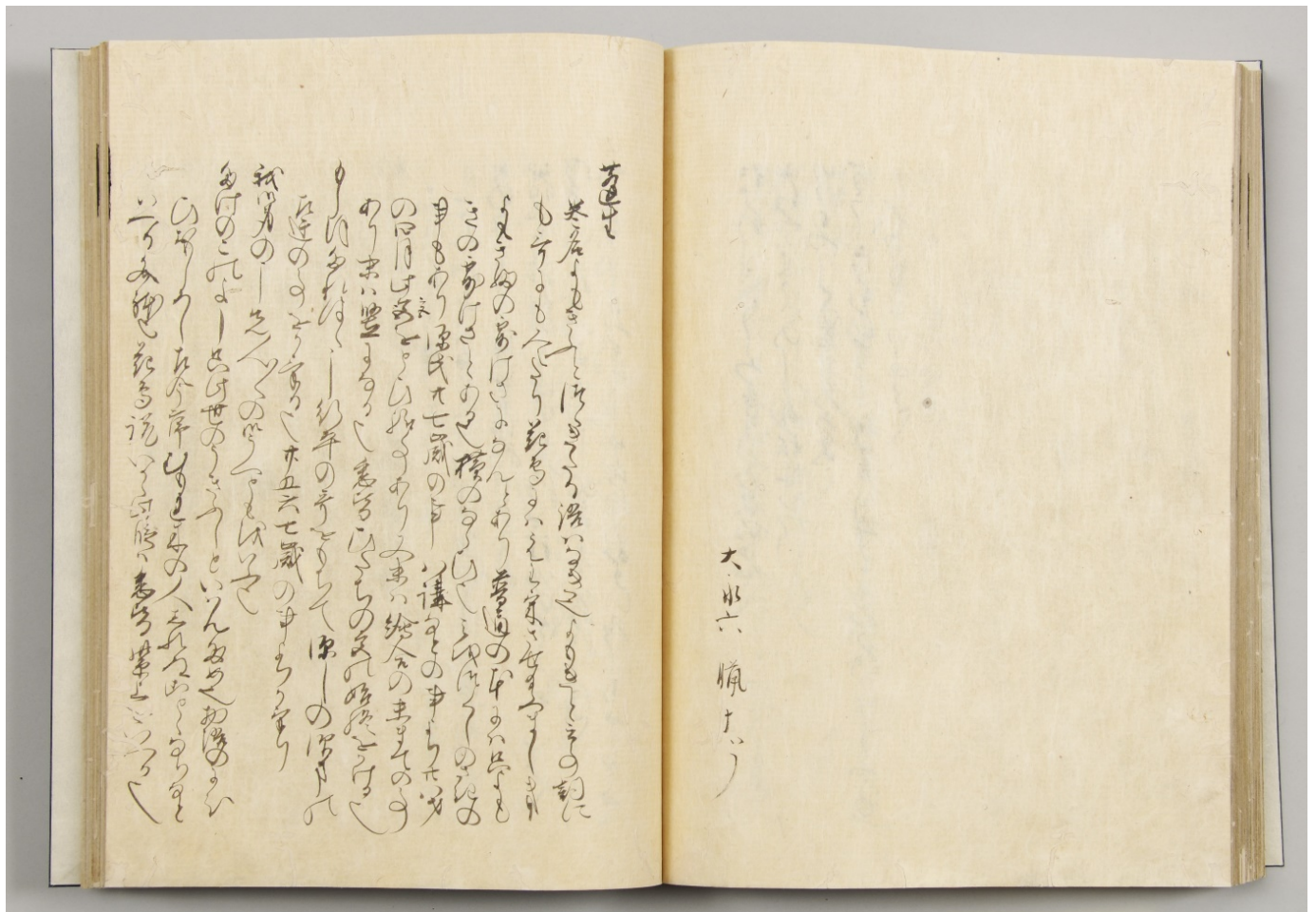
源氏物語聞書

ききがき

江戸中後期写 袋綴装 16冊

縦27.8×横20.8cm 請求記号913.36-14-16 写字台文庫

「三条西公条自筆稿本『源氏物語細流抄』」を忠実に書写した転写本で、本学所蔵の三条西公条自筆稿本と重ね合わせると、その字高（一行の寸法）はほぼ重なり合う。薄様（薄葉）の紙を料紙とし、虫食いの穴もその形をなぞるようにして書写されている。なお、「紅葉賀」の帖は、他の帖と料紙・寸法の異なる別本で、また初音歌^{はつねうた}詞巻^{ことばのまき}をも具備する。



8

ききがき
源氏物語聞書

江戸前期頃写 袋綴装 10冊

縦29.8×横23.6cm 請求記号021-352-10 写字台文庫

「三条西公条自筆稿本『源氏物語細流抄』」の写本である。今般展示するNo.7『源氏物語聞書』（以下「前出本」とする）と同じく初音歌詞はつねうたことば卷のまきを有し、さらに前出本に欠落する「若菜」の上下をも有する。ただし、当該本よりも前出本の方がより原本に忠実な写本である。現在は修復を終え、紺色の新しい表紙が掛けられ、後補の題簽だいせんには「源氏物語」と記される。



源氏物語聞書 ききがき

江戸初期写 袋綴装 二冊

縦28.2×21.6cm 請求記号021-432-2

『源氏物語』の講釈の聞書で、現在のところ当該本が唯一の伝本とされている。内題の下に「永正十三年霜月十九日九州日向国都於郡聞書」と記されることから、永正13年（1516）11月19日以後の成立で、都於郡とのこおり（現在の宮崎県児湯郡こゆぐん）で催された講釈の聞書であることが知られる。講釈は連歌師の宗碩そうせき（1474～1533）によるものと考えられている。聞書を作成した人物については不明。



ききがき
源氏物語聞書

里村昌休著 江戸前期写 袋綴装15冊
縦13.8×横20.0cm 請求記号021-426-15

連歌師の里村昌休さとむらしゅうきゅう（1510～1552）が著した『源氏物語』の注釈書で、その成立は天文19年（1550）である。一般的には『休聞抄』きゅうもんしょうと呼ばれる。近世期にも版本となることはなく、写本で流布した。当該本は、『休聞抄』の少ない伝本の内でも、装訂・書写相とも美しいものである。



11 源氏物語屏風

江戸中期頃 屏風 6曲1隻

縦170.0×横375.5cm 請求記号021-609

絵の作者は不明。屏風に貼られた12枚の絵は、『源氏物語』の「桐壺」「空蟬」「若紫」「須磨」「明石」をはじめ「浮舟」までの有名な帖の代表的な場面を描いたものである。すやり霞に金銀箔を散らし、画面いっぱいの上質の絵具を用いて描いている。この屏風は改装されたものであるが、絵の寸法は一般の寸法とは異なって、縦55cm・横22cmの大型の絵であることから、もとは高さ70cm程の6曲1双の屏風に貼られていたものではなかったかと考えられる。





12

げんじえ
源氏画

狩野探信(守道)筆 江戸後期 絹本 卷子装 3軸
紙高32.0cm 各巻全長338cm 請求記号021.1-188-3

『源氏物語』の「桐壺」から「蓬生」まで各帖一場面を描いたもので、1巻5図、3巻で合計15図である。すやり霞に金箔を散らし、邸内の描写は吹抜屋台の技法が用いられ、色彩は濃厚で、繊細な描線で描かれているため、典雅で優艶な色調をたたえた開放感のある絵となっている。

筆者の狩野探信(守道/1758~1835)は、鍛冶橋狩野家の第7世で、探牧の教えを受け幕府奥絵師も勤めた絵師である。



13 源氏物語絵巻

土佐光貞筆 文化2年(1805) 紙本 卷子装 1軸

高27.5×1393cm 請求記号022.1-205

『源氏物語』の「^{おとめ}少女」から「^{ゆめのうきはし}夢浮橋」まで各帖一場面を淡彩で描いたもので、計34図ある。ただし、本来とは異なる巻順で絵が貼り付けられているところや、書き込まれた巻名と実際に描かれた場面とが一致しないところもある。巻末には、「文化二年冬日 光貞」と記されている。

筆者の土佐^{みつさだ}光貞(1738～1806)は江戸時代中・後期の土佐派の画家である。土佐家は典雅な源氏絵を得意とすることで広く知られている。



くもがくれ
源氏物語雲隠

江戸前期刊 袋綴装 6巻 6冊

縦27.0×横19.0cm 請求記号913.41-12-6 写字台文庫

本書は、『源氏物語』の補作に相当する擬古物語の一種である。「雲隠」とは、『源氏物語』の主人公である光源氏の死を物語る巻であることを意味している。『源氏物語』には主人公の出家や野辺送りの場面が存在しないことから、後代にそれに相当する「雲隠」という巻を置くことが考案された。

巻末の奥書は事実を反映するものではなく、南北朝もしくは室町時代頃に付けられたものであるとされている。

なお、本学には浅井了意作の『雲隠抄』（江戸前期刊）も所蔵する。

龍谷大学大宮図書館 2019年度特別展観
「源氏物語展」

2019（令和1）年11月

編 集 龍谷大学大宮図書館

発 行 龍谷大学大宮図書館

600-8268 京都市下京区七条通大宮東入大工町125—1

電話 075-343-3311（代表）